



山ひとつひとつ仰け反るひなまつり
震災後葦牙胸にささりくる
除染済確認せんと巣箱掛く
兜太逝く瞬き著き雪解星
島酒を寝かせ二月風廻り
抽象は野火の勢の記憶かな
うすらひはよべのすだまのけさう文
夕焚火ひもじき魂をひきよする
こごみ草身に積み隠れキリシタン
巣箱でも作るか空家またひとつ
蔵王嶺の地鳴り遙かや紙を漉く
春遠からじ木立花椰菜の房はづす
天地の声が引き合ふ福寿草
桃の日の輪になり遊ぶ「かえんそや」
海原にひかりの帯や雛飾る

*

国見敏子
清水逍径
幹自聲
栗原利代子
眞榮城いさを
小林さなえ
松本よし乃
志摩晴樹
山田一政
上脇修
中山賢助
久根美和子
倉科繁登
下原培子
日高礼子

春の空より微かなる兜太の鼾
雪、雪、雪、我ら墨絵の中に在り
向き合ひし時が別離や雛納め
理に生きて理を離れよと大氷柱
箱蜜柑一皮剥けば劣等感
春潮や珊瑚の海に漂着油
一里一尺書道部の襷掛け
陽炎に夢見るごとく入りけり
堅雪や遙かといふを知り初むる
男の子夜泣きのたびに木の芽増ゆ
白梅のやうな女には惚れぬ
天地深く呼吸するたび凍りけり
ぶらんこの行きつ戻りつ異国にゐ
焼芋や老ゆる漢のさびしさに
天と地の動き絶えざり茗荷の子

愛甲敬子
谷口とし子
川阪潤子
大澤淳基
伊藤由希子
渡嘉敷皓駄
一志貴美子
野村紘一
瓜田紀子
若槻竹造
窪田英治
小池孝雄
山田勝文
久保田義夫
山崎瑛子

はじめに。「岳」創刊四十周年記念大会を開かせていただき、ありがたいことと、たくさんの方々のご尽力に心からお礼を申し上げます。思い出は期待から始まる。五月十九日、軽井沢の滴るみどりは篤い心の交流によって忘れ難いやすらぎをもたらしてくれるだろう。一期一会、一語一会を噛みしめたい。

ひなまつりの頃の山―ささやかな発見

山ひとつひとつ仰げ反るひなまつり 国見 敏子

小諸在住の作者。小諸からみる浅間山も黒斑山も日本アルプスのような高山ではない。それだけに、「おらが山」といった風情がある。春を迎え、どれも頂を仰け反らして、ちょっと気負った感じ。小諸のひなまつりは三月。ようやく山から小諸の春は訪れる。巧な作者、俳句がやさしくなった。

震災後 葦牙胸にささりくる 清水 道彦

高野ムツオに東日本大震災時の葦牙の角組む力勁さを捉え

えるのが巧み。作者にとり、飛躍の一句になろう。

うすらひはよべのすだまのけさう文 松本よし乃

「うすらひ」というとへうすらひは深山へかへる花の如く(藤田湘子)を思うが、掲句も凝った作。薄氷を描き、春の訪れを見事に捉えている。山中の魑魅(精霊)が夜分に付文を置いていった。それが春早い薄氷だという。深山物語の冒頭のようなお洒落な一句。幻想が薄氷という実体をもつ。

夕焚火ひもじき魂をひきよする 志摩 晴樹

冬の夕方の焚火が醸し出す人恋しき、郷愁に似たなつかし

今月の秀句

除染済確認せんと巣箱掛く 幹 自聲

北陸の地から冬期、雪の少ない福島之地へ除染のアルバイトに出向いたと聞いた。その作業終了後の作。除染が了り、生まれる雛には放射能の影響がないか、巣箱を掛けたというのであろう。被災地の実地作業にあたらな

いと臨場感ある作はできない。体当りで生きぬく迫力を作句に籠める作者。現代の最先端の素材を内側から自分のものとして捉えているところに大いに共鳴する。

兜太逝く瞬き著き雪解星 栗原利代子

兜太はどこへ逝ってしまったのか。雪国の早春にひときわ瞬く雪解星になった。兜太は信念に生きた博愛の人。土俗的な雪解星を想像し、兜太をよろこばす。兜太の貌が見える。

島酒を寝かせ 二月風廻り 眞榮城いさを

宮古島の島酒とはなにか。二月風廻りの時期と勘案するに、甘蔗酒か。黒砂糖も同類なので、独特の風味をもった焼酎を思った。私の好みにもよるが、二月風廻りの季節がいかに先島諸島の早春を思わせる。

抽象は野火の勢の記憶かな 小林さなえ

作者は画家。画業さなかの気負いを「野火の勢の記憶」と称したものか。比喻表現であるが、生々しい野火の勢が見

さを捉え、「ひもじき魂」と、内省からの深みある表現を得た。なかなかの佳吟である。内面がゆたかでないとい生まれない作。

こごみ草身に積み隠れキリシタン 山田 一政

信州でも春先の「こごみ」(草蘇鉄)を食用にする。わが好きな山菜だ。作者が在住する秋田も雪国、こごみを重宝しているのである。先年、秋田のかくれキリシタンの事跡(草生津川の面影橋など)を見せて貰った。「身に積み」に注目。「身に積み」ではない。年々こごみを摘みながら生き延びてきた謂である。長崎や天草ばかりではない、秋田のかくれキリシタン詠に地貌への着実な目配りを感じた。

巣箱でも作るか空家またひとつ 上脇 修

空家が目立つ。人が住まないで鳥の巣箱にでもとのユーモアに、作者の機転を感じる。目の病で苦しい中、少しでも明るく心を展きたい。そんな願いをふと思った。

蔵王嶺の地鳴り遙かや紙を漉く 中山 賢助

バランスがとれた風景句。みちのくの風土の重厚さに心を寄せ、自らを鍛えたいとの願いを感じる。まじめな人柄で、手堅い句に迫力が加わってきたようだ。仙台句会の立て直し

盆花や信濃十六牧つづき 昭和63年

「岳」（昭和六十三年九月号）所載。八月十五日は中山道旧望月宿の神祭。「鈴の音の夜涼に顕ちて粗朶神輿」も同時作。人情家真山尹さんの懇情が身に沁みる。夜の望月句会に山城屋に泊ってお世話になる。佐久人の至誠に感激した。御牧が原の馬鈴薯は最高の味。信濃は十六牧続き、今も牧風情が漂う。『火に椿』所収。

山国の暁つかまつる下り築 昭和63年

「鷹」（平成元年一月号）所載。湘子推薦句。晩秋の犀川（梓川と奈良井川の合流）、明科押野崎辺を念頭にした。西に夜明けの飛驒山脈が走り、景色は完璧。「つかまつる」がそんな気分を詠う。『火に椿』所収。

冬に入る須磨のちりめんじやこ売りも 昭和63年

「鷹」（平成元年二月号）所載。須磨行。瀬戸内海の初冬の海光がちかちかまぶしいばかり。旅先でよく安物買をした。癖のようなもので、須磨での小魚がよかった。

「U」が多く、ゴロが調子いい句で、図に乗って色紙に書いた。『火に椿』所収。

田の中の桃が咲き出す馬籠かな 平成元年

「岳」（平成元年五月号）所載。馬籠藤村記念館での「歷程」第二回春の学校に渋澤孝輔さんに招かれ、「俳句と詩の間」との講演をした。栗津則雄さんなど偉い詩人がいる中で、今になるとひやひやだ。「星空にとりのこされて春の山羊」も同時作。山羊の心境。『火に椿』所収。

一日がたちまち遠し山ざくら 平成元年

「鷹」（平成元年七月号）所載。湘子推薦句。代表作と目され、よく染筆する。染井吉野が終り、山桜が咲く晩春。芳醇な季節。時の速さとからだ感覚がちぐはぐになる。朝なにをしたのか、夕方にはぼーっとして。案外、人生はこんな風に過ぎてゆくのかと想念の坩堝に嵌る。

花菜畑いまも生きゐてド・ロ神父 平成元年

「俳壇」（平成元年七月号）所載。「長崎惜春」。前書「外海町出津」。フランスから殉教の村へ神父の来日が明治十二年。大正三年昇天まで誠心尽力し土に帰る。ドロさまとの敬愛は今も続く。遠藤周作の小説『沈黙』の舞台。『火に椿』所収。

に尽力されている。ありがたいことだ。

春遠からじ木立花椰菜の房はづす 久根美和子

巧さがしだいに身に付いてきた。目先の効いた句でなく、一句にスケールの大きさが出てきたようだ。「春遠からじ」からそんなことを感じる。新鮮な詩情がある。

天地の声が引き合ふ福寿草 倉科 繁登

ときに理が顕ち巧さが目立つが、掲句は堂々たる作。春先の福寿草の群落などを想像すると、目出度い福寿草だけに、その背景にあたる天地をこんな風に讃える気持がわかる。

桃の日の輪になり遊ぶ「かえんそや」 下原 培子

雛の節句に子どもたちが輪となって「お菓子を交換しましょう」と遊ぶ。鹿児島島の「かえんそや」。地貌季語発掘の一句。こんな遊びもいま記録しておかないと忘れられてしまう。明るい薩摩の桃の日、かがやきが伝わる。

海原にひかりの帯や雛飾る 日高 礼子

海を見て暮らしていると、海はかぎりなく「ひかりの帯」をもてあそぶように波濤がさまざまな芸を見せてくれる。雛の日のなのが自然の祝福のようだ。

他に同人集からの推薦候補作を掲げる。

山焼の音はこの世の音ならず 奥山 源丘
牙返る裸婦の凭れし寝椅子かな 斉藤すみれ
天涯の兜太に草矢放ちたき 古畑 恒雄
木の根明く峠油揚屋が混みぬ 渡辺 真帆
鬼やらひ月の裏側誰も知らず 三澤 和子
煌めきを引付け走るスケーター 西澤日出樹

「雪、雪、雪」一つの表現の工夫

雪、雪、雪、我等墨絵の中に在り 谷口とし子

雪の字の下に読点を連ねた、意表を突く表現に新鮮な驚きがある。書道家。終日、家の中で墨絵を描いている。気が付くと外は雪。驚き一つだけでも形象化できれば十分。意欲旺盛。高山の若手のひとり。飛驒高山の冬。風格の工夫か。

向き合ひし時が別離や雛納め 川阪 潤子

雛のことをいゝながら、かすかに人の世の切なさが伝わる。若き日からこんな別れを何回か続けてきたと省みている。一回一回、どんなにか心をこめても、別れは別れ。数々の別れのかなしみによって人は鍛えられ、やがて大きな別れを迎

えるのであろう。そこまで踏み込まないで、その手前で止まるのが巧み。

理に生きて理を離れよと大氷柱 大澤 淳基

札幌の大氷柱が上の理をしっかり受けとめている。生きる上で、なにごとともこの一言に収まる。格言に近いが、自然の中で自然体の表現だけに、骨っぽさがむしろ魅力。

箱蜜柑 一皮剥けば劣等感 伊藤由希子

箱詰めのみ柑、中に一皮剥くと崩れる粗悪なものが混っていた。なんとなく、これ私と思った。「劣等感」ときついことばを用いたことで心理詠となった。秋田勢はみんな競い合って毎月作品を愉しませてくれる。作者もその一人。

春潮や珊瑚の海に漂着油 渡嘉敷皓駄

沖縄の海の碧さ、白さは天下の絶品の景。ところが日に日に汚れてゆく。それが「漂着油」。なんともやりきれない哀しみを捉え、春の潮流の華やぎと対している。つねに一步踏み込んで詠う。受身ではない。地貌の俳人との自覚がある。

一里一尺書道部の櫛掛け 一志貴美子

白梅のやうな女には惚れぬ 窪田 英治

これはこれは、年期的入った女性遍歴をひとくさり。案内逆説ともとれるのが巧い。目の前におられるお方は「白梅のやうな女」なのである。一言申し上げてみたという。

天地深く呼吸するたび凍りけり 小池 孝雄

しんしんと凍りつく大地。こんな凍みがこの頃なくなった。あるいは諏訪湖の御神渡詠とも受けとれる。

ぶらんこの行きつ戻りつ異国にゐ 山田 勝文

今月の秀句

春の空より微かなる兜太の軒 愛甲 敬子

兜太追悼句がしばしば多い。中でも大らかな兜太の軒詠に思わずほえんだ。身近な春の空で昼寝を愉しんでいる。たしかに兜太の軒が聞こえるという。冬眠中の蝮の軒は兜太の作。別世界という遠いところではない。軒が聞こえるくらいに近く、春の空に兜太がいる。死後も現世の兜太ファンを上げますかのようにごく身近に「存在」し続ける。こんなに愛され続ける俳人は珍しい。

雪国信州も北信濃の地貌季語。北へ一里向うと一尺雪が深くなるという生活語。高校の書道部の気負いが「櫛掛け」の姿で目に見えるようだ。大作をものしているのであろう。多忙の中、よく氣力を失わないで、こなしている作者。

陽炎に夢見ることく入りけり 野村 紘一

さりげないよさがある。「夢見ることく」の比喩が自然。一行詩俳句の美しさ。おのずから作者その人の素朴さが伝わる。

堅雪や遥かといふを知り初むる 瓜田 紀子

堅雪が凍渡と同様、東北、岩手や秋田の地貌季語。春先の寒さがぶり返すことで起こる積雪の表面が堅くなること。そんな上を踏み意外な近道をして目的地に着くことができる。そこで「遥か」という距離感を知ったという。頭のいい人の句だ。遥かとはなんと魅力ある感覚か。着想が見事。

男の子夜泣きのたびに木の芽増ゆ 若槻 竹造

下の句「木の芽増ゆ」への転じが巧い。勘がつよい男の子の夜泣き。いよいよ本格的な春だという。俳句作りの見本のような作。

忙しい人である。ぶらんこの揺れに目を止め、ご自分の日常をそこにいい止めたもの。人生さかなときの華やぎが一句からほのかに伝わる。「異国にゐ」の軽さもいい。

焼芋や老ゆる漢のさびしさに 久保田義夫

九十一歳はまだまだ。焼芋好き。余裕あり。いつの間に九十歳を越えたとの感慨は若さを思わせる。

天和地の動き絶えざり茗荷の子 山崎 瑛子

「茗荷の子」との俳味を醸す天地の生動をおさえ、お見事。一句採られ、それが秀句とはなかなか。

他に岳集推薦候補作を掲げたい。

春めくや今日も遠くの山眺め 小川 泰子
雛納病癒ゆればまた喧嘩 堤 保徳
ポケットに鉄の塊冬の雷 古畑富美江
羊飼住む洞窟や鳥帰る 二階堂なつみ
木の根明き銚とび交ふ正念場 百瀬石涛子
離れゆく流氷に立つ獣の仔 西田しづか
うららかやパン焼き上がるまでのキス 木村さとみ
涅槃会や木の根木の根にある叫び 樋口 芦笛